

「あなたはどこにいるのか」 (伝道礼拝の為、新共同訳聖書を使用)

創世記

第3章 8節～13節

説教 本庄侑子伝道師

「どこにいるのか。」(9節)。今朝この場所に響く神の言葉です。「あなたはどこにいるのか。」が元の言葉です。私たちは、そう呼び掛けられたら何と答えるでしょう。肉眼に映る事柄ではなく、神との関係に於いて、どこにいるのかが問われているのです。私たちは人生に於いて様々な問いを自問します。しかし、この神からの問いこそが、重大な問いです。

創世記第2章は、神が私たち人間を大切に造り、愛の配慮が行き届く園の中に置かれたこと、また、隣りに置かれた人と助け合って生きるようにして下さったことを知らせます。しかし、第3章では一転し、私たちがよく知る現実を痛烈にえぐり出します。「その日、風の吹くころ、主なる神が園の中を歩く音が聞こえてきた。アダムと女が、主なる神の顔を避けて、園の木の間に隠れると、主なる神はアダムを呼ばれた。」(8節～9節)本来、造り主である神の前で喜んで生きる事ができる筈であるのに、神を避け、隠れてしまうのです。それは、この直前に女が木の実を取って食べてしまうシーンから始まります。神に「園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。」(2章16節～17節)と言われていたのに、女は蛇に誘惑されて“善悪の知識の木”の実を食べ、女にすすめられたアダムも食べてしまいます。

“善悪の知識の木”さえ無ければ、過ちを犯さずに済んだのでは…と、思いたくなります。「園のすべての木から取って食べなさい。」と言われた私たちは、園の中で自由に生きて良いのです。しかし、私たちは禁止の言葉の方に耳が行きます。そして、神の言葉が一人歩きし、本来の神の意図から遠く離れた受け止め方をしてしまいます。

神が植えられた“善悪の知識の木”は、神が世界の所有者、責任者であることを知らせる、家の表札のようなものでした。そこから取って食べるという行為は、自分を神の位置に置いてしまうという事です。世界の所有者であるかのごとく責任を負うなど、耐えられない被造物であるのに。“善悪の知識の木”こそ、あなたは私の被造物でいて良い、という神の愛の配慮でした。

しかし、女は実を取って食べてしまいます。それは、「いかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように」(3章5節)見えたのです。そして確かに、私たちは、被造物としてではなく、自分の力で自立して生きるという事が賢い生き方としてもはやされ、追求される世界に生きています。しかし、聖書はそれを“罪”と見なし、憎みます。神が言われた通り「食べると必ず死んでしまう」(2章5節)のです。

神の保護から抜け出し、自分のことを自分自身で決めるようになったとき、私たちは自分がどこにいるのか、自分が誰であるかが分からなくなります。恐れと不安に支配されます。神の悲痛な声が園に響きます。「取って食べるなど命じた木から食べたのか。」(11節)この神の嘆きの言葉が、アダムには咎(とが)めの言葉に聞こえたのでしょう。アダムは言い訳を始めます。自分が食べたのは、女に言われたからだ。そもそも、神が、私の隣に女を置いたからだ、と。神の保護から抜け出すとき、人は、神との関係と、共に生きる人との関係を、自ら破ることとなるのです。女もまた、自分が食べたのは蛇に言われたからだ、と言います。憎しみが憎しみを生む負の連鎖が始まります。聖書では、続く4章で殺人が起きます。

信仰は現実逃避ではありません。神は現実逃避などさせては下さいません。神はこの世界を見抜き、私を知っておられます。私たちの“罪”が作り出す混乱や絶望の現実を見つめます。その上で、神は私たちを愛し抜かれるのです。私たちが変わってしまっても、神は変わらず、私たちが生きる園の中を歩き、呼び掛けて下さいます。「食べたのか。」(11節)と、悲痛な声をあげつつも、私たちを諦めず、造り主として保護して下さるお方なのです。その愛は十字架にまで及びました。

神が全てを支配して下さる世界の中であって、私たちは、神に造られた被造物として生きて良いのです。私たちは、罪を滅ぼして下さった主の復活の力によって、神と人とを愛する自由の中で生きられます。「あなたはどこにいるのか。」と神に問われた私たちには、「私はあなたと共にいます。」という答えが手渡されているのです。

(記 説教要約奉仕者)